

城  
壁



# 目次

城壁 5

初版あとがき 274

解説 榛葉英治の難民文学（和田敦彦） 275



# 一章

## 1

冬の霏もやのなかに、城壁が現われ、朝陽が斜めに壁の凹凸の影をつくった。高さ二十メートルの城壁のしたには、灰色の軍服が折りかさなっていて、その辺からは人間の焼けるいやなにおいが、つめたい微風につながられてくる。城壁の上からは、中国兵が逃げようとして使ったらしい縄や、つないだ布などがさがり、壁の上にも死体がみえる。市内の銃声は散発的になっていた。南京の街の空を生きもののようにうごいているのは、弱い陽をさえぎる火災の煙である。

その煙がながれてくる漢中路の街角に、日本軍の最初の部隊がいた。腹這いになった一人は軽機関銃の照準をつけ、そばに銃に日の丸の旗をつけた兵が膝を立てている。双眼鏡で前方の市街地を偵察しているのは小隊長だ。

街には、人影はない。砲弾が落ちて敷石が散乱した通りで、横倒しになったトラックが黒い煙をあげて燃えている。野砲の砲弾は後ろの城壁にも白い煙をあげ、そのまろい綿菓子のような煙がゆっくりとうごいた。

背の高い小隊長の双眼鏡には、瑠璃瓦るりの屋根の長方形のビルと、葉を落した立木が映り、梢のあいだに、アメリカの国旗が垂れている。長方形の建物の窓には、敵兵の灰色の軍服がちらちらした。小銃の

火もみえる。少尉は図囊ずのうから地図を出した。この先は上海路で、百メートル先のあのビルには、まだ相当数の敵兵がいる。

軽機関銃の照準をつけた寺本伍長が、そばに立っている倉田軍曹に話しかけた。

「班長、おれたちは、南京一番乗りらしいぞ。敵さんは、もう、撃ってこないらしいな」

「油断をするな。昨夜の戦鬪を、忘れるなよ」

拳銃を手にした倉田軍曹は、部下たちに向かった。江藤少尉は無言で双眼鏡の視野を横にすべらせた。後ろで、立ったり片膝を立てたりした兵隊が、小声で話した。

「まったく、昨夜はひどかったよ。おれは、小隊は、全滅かと思ったよ」

「おまえ、渡辺伍長の死体を見たかよ？」兵隊は声をひそめた。「見られたもんじゃなかったぜ。顔が半分なくなってるんだ……」建物に身をよせた兵隊は、気持悪そうにツバをした。

小隊長とならんだ倉田軍曹も、そして五十名余りの兵たちも、服は泥と血でよごれ、髭がのび頬のこけた顔に血ばしった眼が光っている。

兵隊が通りを見て話した。

「支那人は、一人も見えねえな。何処へいったんだろう？」

「油断をするな。隠れてるかもしれないぞ。いよいよ、南京陥落か。内地じゃ、提灯行列だな。おい、今夜は、米の飯がくえるな、きつと……」

「おれは、眠りたいよ」

江藤少尉が双眼鏡を首に吊ったサックにしまい、手をあげ、ふりかえった。

「よし。各個に、前進……みんな、建物につたわってゆけ。軽機分隊は、おれといっしょにこい」

横通りを見た兵隊が知らせた。「あ、隊長どの。人がきます。白旗をもってます」

「待て。射つな」

小隊長は後ろの機関銃手にいった。中国人の死体が二つか三つ見える敷石が散らばった横通りを、二人の男がこちらにくる。外国人だ。片手に小さな白旗をもった一人は裾の長い黒い服を着た宣教師で、長靴をはいた肥ったもう一人は、背広に腕章をつけている。近くへくると、それが赤と白の地に黒のハケンクロックを染めたナチスの腕章であることが、少尉にはわかった。

宣教師はいくらか青い顔をし、背広の外国人は笑っている。肥った男は少尉のそばにくると立ち止り、片手をあげてナチス式の敬礼をした。少尉も敬礼をした。ドイツ人は少尉に握手をもとめた。背広の胸に勲章をつけている。小柄の軍曹も兵隊も、おどろいて外国人を見まもった。なかには口をあけている兵隊もいる。

背広の男が英語で話すのを、宣教師がかなり上手な日本語で通訳した。

「ワタクシハ、ドイツ人ノヨーン・ラーベデス。私タチハ、南京ノ外国人ノ委員会ヲ代表シテキマシタ。私タチハ、日本軍ニ敬意ヲハライマス。ワタクシタチハ、日本軍ノアナタガタヲ、今日、初メテ見マシタ」  
口のまわりと顎に茶色の髭を生やした背の高い宣教師は微笑した。「ワタクシハ、アメリカ人ノミルス神父デス」

「自分は、先遣部隊の江藤少尉です」

草色に塗った鉄帽のしたに黒縁の近眼鏡が光るやはり背の高い少尉は、いまいったことをつぎに英語でいった。二人の外国人の顔には、安堵と親しみがうまれた。同時に宣教師の緑色の眼とドイツ人の水色の眼とが、英語を話す日本の若い将校をいくらかおどろいて見まもった。

ラーベというドイツ人はポケットから地図を出し、肥った指でおさえて、英語で説明した。

「あれは、米国大使館です。その向い側にある建物——あれは、金陵大学です。この地域は、南京の一般市民を收容した難民区——非武装区域です。そしてこの赤い印をつけた三カ所の病院は、赤十字病院であります」

少尉はうなずいたが、手をあげて、「交通銀行大樓」と金文字で書いた建物を指さした。

「しかし、あそこには、中国兵が……」

「アノ人タチ、戦ウ考エ、モウ、アリマセン」

そばから宣教師が日本語でいった。ドイツ人はドイツ風の発音の英語でつづけた。

「われわれの国際委員会は、一昨日から、難民区に逃げこんできた中国兵の武装を解除した。彼らがまったく戦意を失っていることも、あわせて日本軍の上層部へお伝え願えないだろうか？ ……」

「よろしい。そのように報告します」

若い少尉は地図と翻訳文をつけた文書を受けとった。二人の外国人は横通りをもどっていった。

少尉は図囊から出した紙に走り書きして、そばの兵隊を呼んだ。

「鈴木上等兵、本部へ伝令だ。これを持ってゆけ。よし、小隊、前進！ ……」

## 2

柳川兵団××部隊の先遣隊であるこの江藤小隊は、ひと月前の十一月五日に、杭州湾に敵前上陸をした。そのときに渡された食糧は六日分であった。敗走する敵と戦いながら、毎日行軍をつづけた。

江藤小隊は、はじめは六十名であった。機関銃分隊と擲弾筒班てきだんどうをもっている。小隊長の江藤清少尉は甲種幹部候補生出身で、大学の法科を出ていた。小隊には、専任下士官の倉田徳平軍曹がいる。江藤少尉より一つ年下の倉田軍曹は大隊本部で曹長勤務をしていたが、上陸作戦のために、軽機分隊とともに、戦闘小隊に配属された。彼が腰のサックにいれている十四式拳銃は、曹長勤務時代の私物をそのまま持ちこんだもので、江藤少尉は黙認していた。

関東地方出身の彼らは、宇都宮の第一一四師団に召集され、五島列島に集結してから、新編成の柳川兵団の指揮下にはいった。



雨つづきのぬかるみを、敵を追ってすすむ部隊には、弾薬も食糧も輸送が追いつかなかった。兵隊は泥だらけになり、髭ののびた頬はこけた。道には敵の武器や弾薬が散らばり、ドイツ風の鉄兜まで数多く棄ててある。

「奴らは、鉄砲を後ろに担いで射ちやがる……」と、もとは印刷工で、ときどき面白いことをいう木村上等兵が、退却する敵兵を笑った。

中国軍は退却をしながら、川やクリークの橋を破壊し、部落を焼きはらった。日本兵はつめたい水に胸までつかって渡った。濡れてブヨブヨになった乾<sup>かん</sup>麵<sup>めん</sup>麩<sup>ぼ</sup>をたべ、生米をかじった。二日間、何も食わないこともあった。上陸後半月で、兵隊の頬は肉が落ちた。「南京へ、南京へ……」という言葉が将兵の合言葉になっていた。その南京には、この雨のなかを、いったい何日あるいたら辿りつけるのか、重たい銃をかついだ兵隊は、外被の頭巾や雨合羽をかぶり、前をゆく兵隊の泥にはまりこむ靴と、水溜りに絶間なく落ちる雨滴とを見てあるいた。

「おい、とまれ……」

先頭を歩いてきた倉田軍曹が立ちどまり、横の江藤少尉を見た。「小隊長どの……」

道ばたに、五つ位の男の子の死体が雨にうたれていた。そばに茶碗と箸が棄ててある。

「よし。小休止……」江藤少尉はうなずいた。

頭巾を後ろにあげていた倉田軍曹はまつ毛に雫のついた眼で、立ちどまった兵隊たちを見た。

「おい、誰か、この子供を埋めてやれや」

三人の兵隊が小さな円<sup>えん</sup>匙<sup>び</sup>をもって、前に出た。三人が穴を掘っているあいだ、ほかの兵隊たちは合羽のしたで首をちぢめ、今夜は屋根の下に寝たいものだ、米の飯はあるだろうかと心細い気持で考えていた。

「寒い。死んだ子供なんか、どうでもいいじゃないか。軍曹も、もの好きだな」と兵隊の一人が、軍曹

に聞えないように不平をいった。ぬれた泥を掘りながら、寿司屋だった鈴木上等兵がいった。

「可哀そうにな。うちの坊主を思い出すよ」

「ついでに、かあちゃんもか。出発の時に面会にきていたじゃないか。おめえのかあちゃん、なかなか別嬪べっぴんだな。さだめし、あそこもよかつべえ。なあ、鈴木の旦那……」独身者の印刷工が泥をほうった。

「ばか野郎。変なところで、女房の話をするな。こっちは壘丸きんたままで縮こまってらあ。腹はへるしよ」

「どこまでつづくぬかるみぞ……。さあ、坊や、埋めてやるぜ」

埋めた上に、別の兵隊がそこから拾った破れ傘を立てかけ、「ナムアミダブツ……」と拝む真似をした。二、三人が低く笑った。

「前進……」

小隊長の澄んだ声があった。江藤少尉は歩きながら、現役志願の倉田徳平軍曹には、なかなかいいところがあるなど考え、初めて親しみの感情をもった。

まだ戦鬨らしい戦鬨のないことが、彼らにとっては救いであった。この分なら、南京陥落もたいしたことはないかもしれない。

ところが、南京に近づくにつれ、その目算違いであったことがわかった。土壁の民家から、とつぜん、撃ってくる。中隊で迫撃砲や擲弾筒、歩兵砲などをうちこんで屋根や壁がくずれ落ちて、その廃墟になった部落からは相変らず敵弾がとんでくる。占領して踏みこむと、農家のなかには土囊がとんであって、床下にはコンクリートの機関銃座があり、何人かの少年兵が死んでいる。日本の将校や兵隊は、敵兵の抗戦意識のはげしさを知らされた。

ここは戦場であった。田圃や麦畑のある内地によく似た田園風景のなかにも、丘や藪に堅固なトーチカが隠されている。

田のなかをながれるクリークにかかった土橋のそばに、ひとりの女が死んでいた。そばに荷物が散ら

ばっている。逃げる途中で、流弾にやられたのだろう。晴れた日で、黄色いクリークには雲が映っている。

「おい、女が死んでるぞ」

二列縦隊の先の方で、兵隊がいった。隊列はそこでとまり、後ろからきた兵隊もかたまつた。一人が珍しいものでもみつけたように後ろに教えた。

「おい、女だ。赤ん坊を抱いてるぞ」

「ばかな女だ。こんなところをうろろ歩いてやがるからだ」

うつ伏せに倒れた母親の腕のしたで、赤ん坊が手をうごかし、大きな眼をあけていた。男の子か、頭を剃り、両耳の上だけに毛の房を残している。

倉田軍曹が靴先で女の顔を仰向かせた。女は眼をひらき、口からながれた血の筋が乾いている。倉田軍曹もかたまつた兵隊も、褲子の割れ目から小さなチンポコを出した小さな子に視線をおとした。両手をうごかしている赤ん坊の黒い瞳には、青空と白い雲が映っているようにみえた。前線から、せかしたてるように砲声がきこえる。

「おい、射ってしまえ。生かしとしても仕様がなぞ」

倉田軍曹が兵隊をふりかえっていった。兵隊は顔を見あわせた。

「何だ？ 軍曹……」

ゆき過ぎた江藤小隊長がもどつてきて、倉田軍曹にきいた。

「はあ、どうせ残しといっても、同じじゃないですか？ かえって可哀そうですね」

軍曹と少尉の眼が合った。二人はそれ以上は何も話さなかった。倉田軍曹の細い眼は、江藤少尉の眼鏡の奥に複雑な感情を見た。ためらいと、一方では軍曹のいうことを半ば肯定しながら、相手を非難する眼である。江藤少尉は頬がこけた軍曹の茶色の眼に、はじめて冷酷な光を見た。

「小隊長……」

どうしますか？ と問いかけられて、江藤少尉はぐるりと見まわした。眼にはいるものといえば、刈りとられなかった稲が腐って倒れている田圃と、部落のこわれた土塀や、焼け焦げた家の残骸だけである。少尉は決心しかねて、いいかけた。

「しかしだな、軍曹、後からくる誰かが……」

「よし、おれがやる……」

そのとき、そばからすすみ出た大男の寺本伍長が、銃先を無造作に赤ん坊のくりくり頭にむけた。銃声と青白い煙のなかで、それは柘榴ざくろか小さな西瓜すいかをたたき割ったようになった。寺本伍長は倉田軍曹をふりかえり、髭面の白い歯をみせて笑った。青い顔になった少尉が寺本のそばへきたが、相手の眼を瞞みろめただけで、なにもいわなかった。

母子の死骸を息をのんで見まもっている兵隊のなかで、二人の子持ちの鈴木上等兵は、戦闘帽を脱いで額に浮いた冷汗を袖でふき、つぶやいた。「むづかしいことをしやがる。だけどな、これが戦争というものだ。おれたちは、いま、戦場にいるんだ……」この召集兵は終りのほうは自分に言い聞かせた。

今度は、死体を埋めてやろうという者はなかった。

### 3

江藤小隊はいつも最前線にいた。そのことにも馴れた。敵と遭遇し、これを撃破して進む。毎日がそのくりかえしだ。戦闘が終ると、まず部落にはいつて食糧探しだ。馬喰ばくろうだった寺本伍長とその腰巾着こしぎんちやくのもと印刷工の木村上等兵の二人組は、食糧探しの名人だ。

川の畔の草原に三つの幕舎が張られている。部隊の幕舎が点々とみえ、炊すいさんの青い煙がところどころからあがって、馬や驢馬ろばの嘶いなく声こゑがきこえる。田や畑のなかに網の目のようにクリークがつながって、黄色くなった背丈ほどの葦が風にそよぎ、乗り棄てた舟のそばを、十羽ほどの家鴨あひるが啼なきながら

泳いでいる。その水面に夕焼け雲が映っている。米の飯とアヒルの焼鳥で久し振りに満腹した兵隊たちは、つめたい水で体を洗ったり、拭いたりしたあとで、脱いだシャツのシラミをとっている者や、仰向けに臥ころがって何となく夕空をながめている者もいる。周囲は黒々とひろがった地平線だ。

「支那は、広いなあ」

水で体を拭いていた兵隊が、感心したように見まわした。

することがなくなると、暗くなるまえに、兵隊たちはそれぞれ写真を出して眺めた。満足すると、胸ポケットの手帳や、千人針の腹巻に大切にしまいこんだ。

天幕のそばで、焚火が燃えている。六、七人の兵隊があつまり、木のはじける音と笑い声がした。兵隊たちの話は、家族か、女か、食いもののことしかない。彼らは戦争を忘れたかった。明日は死ぬのかもわからないのだ。いつも話の中心になるのは、第三分隊の寺本寅吉伍長だ。

馬車轆ひききをやっていた寺本伍長は上衣を脱いだシャツの腕まくりをし、白い太い腕に花札の桜の刺青いれずみがみえる。寺本は荷馬車轆きのかたわら、農家を相手に、牛や馬の売り買いの馬喰ばくろうの商売もやった。

寺本は話した。

「百姓の女房は、昼飯どきにゃあ、たいてい家にいるもんだ。おれが、今日こんにちは、いいお天気だね、おかみさん……といっちはいっていくと、たいてい、どこでもお茶ぐらいは出してくれたよ。おれは、しちめんど臭く口説いたことなんかないぜ。助平話をするんだ。いやだね、このひと……なんていいながら、顔を赤くして聞いているから面白えよ。おれは、ぜったい手荒なことはしなかったな。そんなことをしたら、村じゅうの男に半殺しにされる。なに、場所か？ 場所は、納屋なやでも、裏の縁側えんがわでも、何処にでもあらあ。相手次第よ。あとは、おれもおかみさんも、何食わぬ顔よ。つぎにゆくとな、女の方が待っていてな。寅さん、あっちへいこうよ、って眼で合図しやがる。あんたあ、待ってたよ。ちっともこなかったね。ほかにいいひとがいるんだろ、ねえ、寅さん……」

寺本伍長はニヤニヤ笑って、村芝居の役者みたいな声色を使った。陽がうすれた地平線の向うで、鈍い砲声がしている。

「よう、色男！」

「たまらねえな。おれもやってみたいよ」

「まったく、伍長どのは、話がうまいな」

若い兵隊たちは戦場にいることも忘れて、寺本伍長の髭面を見守った。寺本は得意な顔で皆を見まわす。

「そうよ。おれは浪花節語りになりたかったんだ。まあ、こんな女が、おれが商売にゆく村にゃあ、たいてい一人ぐらいいはいたな。山で草刈りをしていた娘に、うまく話しかけてよ。五円札を見せてやったら、娘はまっ赤になつて下を向いてな。それでも、自分で腰巻をひらきやがった。百姓娘の赤い腰巻って、いいもんだぜ」

膝をかかえたり、臥そべって両手に顎をのせたりした兵隊たちは生唾をのみこんで、その赤い腰巻や、百姓娘を頭にうかべた。寺本伍長は枝で火をかきたて、いつもと違っておとなしい言い方になった。

「女って、情が深いもんだよ。百姓の女房なんて、朝から暗くなるまで、田圃や畑を這いずりまわって、楽しみちゆうものがないんだな。そこへいくと、現金をもって、ぶらぶらしているおれなんか、よっぽどよく見えるんだな。おれが、初めて女を知ったのは、十五のときよ。相手は、おしげっていう後家で、子供相手の一文商いをやっていた。寅ちゃんは、もう、一人前だつて感心したぜ。おれは、女って、こんなにもいいものかと思つた。ふっくらしてよ、おふくろに抱かれたみたいだ。おれのおふくろは、おれが赤ん坊のときに、男と逃げちまつた。おれは、親父の顔を知らねえ。何でも、行商人だつたそうだが、おれは、祖母さんに育てられた。高等科を出て、浪花節語りにもなるべえかと、素人芝居に出たりよ、祭りの角力で小結びになつたりよ、ぶらぶらしてるときに、馬喰うの親方にひろわれたんだ……」

珍しく周囲に敵のいない戦場で、焚火をかこんだ兵隊たちは戦場に在るのを忘れていた。

「馬喰うって、いい商売だぜ。皮靴をはいて、コール天の乗馬ズボンでよ、鳥打ち帽をかぶってな。旦那衆とも、酒を飲むしな。馬市じゃあ、軍馬買上げの将校とも気易く話をするしよ。まったく、馬喰うほどいい商売はないと、おれは思うぜ。誰にも使われないしよ。自分のやりたいことができるものな。おれが知ってるのは、牛や馬と、女だけだ……」

兵隊たちは笑った。寺本寅吉もまわりの顔を見まわし、大きな口の金歯をみせて笑った。「おまえら、淫売しか買ったことがないって面おもをしてるな。情けねえ奴らだな。しろうと女でも、たいいていの女は、男が手を出すのを待ってるんだぜ。いちばん面白えのは、ひとの女房よ……」

本所で小さな寿司屋をやっていた鈴木上等兵は、寺本らの話には興味がない。焚火からはなれた枯草に臥ころがって、写真を見ていた。手がくたびれると胸の上におき、またしばらくしてから、とりあげた。三十五の鈴木初太郎上等兵は思い出にひたっているのだ。焚火のまわりの笑い声はきこえなくなり、盛り場の表通りをあくるくにぎやかな下駄の音がきこえる。手拭いで鉢巻きをした彼は、表の格子戸が開くと、「……しゃい」といい、まず台をふく。お美津が湯呑みに茶をついで出す。朝はやく、河岸かしへ種の仕入れにゆく。お美津がゆくこともある。十二時に店をしめると、彼は銭湯へゆき、二間ふたまの二階で、女房を相手にお茶をのむ。恋女房なのだ……

「おい、鈴木、おまえ、また、写真を見てるのか」

鈴木よりは十も年下の渡辺伍長がきて、そばにあぐらをかいた。

「しまわなくてもいいよ。ちょっと見せろ。ほう、鈴木のお奥さんは、なかなか美人だな。子供は二人か。この男の子、いくつだ？」

「五つですよ。名前は、正太郎です。家内は、正坊って呼んでますがね」

「この赤ん坊は、女の子だね。ふうん、可愛いな」

起きあがった鈴木上等兵は得意そうだ。「はあ、去年、生れて、君子っていうんです」

羽織袴で立った自分の横に、丸まげに結った妻が赤ん坊を膝にのせ、背広を着てハンチングをかぶった男の子が立っている写真をもう一度見てから、軍隊手帳には喜んで胸ポケットにしまった。渡辺伍長は枯草の茎をくわえて、考えこんだ風にきいた。

「鈴木の家は、本所だったね？ 本所というと、寺島町とは近いのか？」

「寺島町というと、玉ノ井ですね。同じ川向うですから、近いといえれば近いな。渡辺分隊長は、玉ノ井に縁があるらしいな」年かさの上等兵は髭面でニヤニヤ笑った。

「いや、ちがうよ。ただ訊いただけさ。鈴木上等兵は、その奥さんと、好きで一緒になったんだろ？」

「ええ、まあね」

「奥さんは、何をしてたんだ？」

「白雲閣という料理屋で、女中をしていたんです。あたしの親方の店の近くでね。それでまあ、蛇の目寿司の看板を分けてもらって、あいつと世帯を持ったというわけですよ。自分が二十八の時です。間口一間半のちっぽけな店ですよ。分隊長どの、帰還したら、ぜひ、きてくださいよ。蛇の目寿司っていうんだ」

「鈴木、料理屋の女中というと、やっぱり、客の相手をするのか？」

「分隊長、それは、どういう意味ですか？」鈴木上等兵は怒って顔を赤くし、年下の伍長を見返した。

「いや、すまん。そんなつもりで、訊いたんじゃないんだ」

「じょうだんじゃないよ。仮りに、そんなことはいわなくてくださいよ。お美津は、堅気な仲居で、御主人にも信用されていたんだ。玉ノ井あたりの淫売たあ、ちがいますよ」

「鈴木、怒るなよ。勘弁しろよ、な。そうか。鈴木のお奥さんは、仕合わせだなあ。鈴木みたいな亭主をもつて……」



「まあね」上等兵は機嫌を直した。「でもね、あいつ、留守のあいだ、店をどうしてやっていくか、自分分は心配です。いつも写真を見ちゃあ、考えてるんですよ。まあ、親方が面倒を見てくれるけど、やっぱりね」

「まったくな。おれなんか、現役志願で、好きで軍隊にはいったんだからいいけど、お前らみたいな召集兵は、気の毒だよ」

「なあに、お国のためですよ」

鈴木上等兵は人の善い顔で笑った。渡辺伍長は真剣な顔になった。

「鈴木、お前、ほんとに、そう思ってるのか？」

肥った上等兵はびっくりして伍長をみつめた。おとなしい渡辺伍長はいつになく、はげしい口調でいった。

「おれなんか、食えなくて、軍隊にはいったんだ。小学校を出ただけじゃ、就職なんか無いもんな。巡查になるか、どっちにしようかと考えたんだ。鈴木は、いいよ。好きなおかみさんがいるし、腕に職があるものな。おれたち小作人の倅には、今の世の中じゃあ、どうすることもできないんだ。おれは、中学にはいりたかったよ」

「でも、分隊長は、教導学校で最右翼だったそうじゃないですか」

「へっ、頭が禿げて、やっと万年少尉か」

渡辺も鈴木も、中隊本部の兵隊あがりの口喧ましい魚往少尉を思い出した。渡辺伍長は草の茎をべつと吐きすてた。空の夕映えは消え、焚火の焰が明るくなった。夕闇に火の粉がとび散った。

「奴ら、豪勢な焚火をしてやがる。懲罰ものだぞ」

「敵は、ここいらには、いないですよ。とつくに逃げちまった。珍しく静かな晩だなあ」

「寺本の奴、また、ワイ談をやってやがる。あいつは、バクチと女の話のほか話すことがないらしいな。」

寺本も、根はいい男だよ。馬喰<sup>ばくろ</sup>うなんていうと、村のまともな家じゃ、人間並には扱われないがな。戦争へきて喜んでるなあ、あいつぐらいのもんだよ。寒くなってきたな。鈴木上等兵、寝るか。体を休ませとくんだ。明日あたり、戦闘があるかもしれんぞ。敵はゲリラ作戦をとってるからな。お互いに、死んじゃあ、つまらんよ」

立って伸びをした渡辺伍長は、月光をうけた白い雲がたなびいている地平線のほうを見た。鈴木上等兵も立って星空を仰ぎ、小便をした。彼は無意識に自分のものをつよくにぎった。妻を思い出した。

「ああ、お美津、いつ、おまえと会えるかなあ。あのときみたいに、おまえと寝たいよ」彼は空と地平線を見て、考えた。支那は広いものなあ。敵を追っていったって、二、三年はかからあ……。

鈴木上等兵は天幕にもぐりこみ、枯草の上で一枚の毛布にくるまった。胸に手を組み、眼をあいていた。まわりでは、いびきがきこえている。焚火も消えた。

出征前に、美津江が面会にきたときに、外出許可をもらって、町へ出た。小料理屋の二階へあがった。あの時だけは、子供をつれてきた女房に腹がたった。「おい、お美津、何とかしねえか」心配せしておれはいった。美津江は白粉の濃い顔を赤くして、下に手水<sup>ちよすず</sup>に降りていった。年増の女中があがってきて、隣の部屋に蒲団を敷いてくれた。お美津は先に寝て、子供には、「お母ちゃん、ポンポン痛いんだよ。坊やは、本を見ておいで」といった。子供はキャラメルをしゃぶり、絵本を相手に大声でしゃべっていた。しばらくして襖が開いた。口の脇を舐だらけにした子供が不審そうな顔で立っていた。「父<sup>ちち</sup>ちゃん。父ちゃんも、ポンポンいたいの？」お美津の顔がぼうつと赤くなった。「いやだ。正坊、あっちへいっていで」……

そのはずかしそうな声まではつきりきこえると、鈴木初太郎上等兵は低く笑い、同時に涙が出そうになった。枯草の音をさせて、臥がえりをした。

「それにしても……」と彼は考えた。「渡辺伍長は、なぜ、あんなことを訊いたんだろうな？　いかにも、

おれの女房がへんなことをやっていたみたいないかたをしやがった……」

歩哨線のほうで、声がした。江藤小隊長だ。

「歩哨、異状はないか？ あの山のほうで、ノロシでもあがったら、すぐに知らせろ。あの山の向うに、部落があるんだ」

## 4

江藤小隊は敵に包囲された。本隊の尖兵小隊となり偵察しながらゆくうちに、後方で本隊と敵が交戦するはげしい銃声を聞いた。江藤少尉は近くの小高い丘に壊れた廟をみつけ、いそいでそこに兵を配置した。まわりは禿山と高梁畑で、近くの部落の土塀の陰や丘の上から、敵は撃ってくる。夕方になって雨が降りだした。小さな関帝廟は屋根が吹きとばされていた。長い顎髭を垂らした泥でつくった大きな関帝像が濡れているそばで、土塀に軽機をすえた渡辺伍長の横に、倉田軍曹はついていた。もし敵の大部隊が攻撃してきたら、全滅であった。頼みは本隊が前進してくることだけだ。上陸いらい、江藤小隊は初めてこんな目にあった。

「渡辺、弾丸は充分あるか？」

江藤少尉が暗くなつたなかをそばへきた。雨の音がしている。

倉田軍曹がいった。「はあ、あります」

「敵は、本隊に攻撃を集中しているようです。こっちは手が廻らんのもかもしれません。さっきから、火線がだいぶ北へ移つたようです」

「本隊は、大丈夫かな？」

暗闇のなかで、少尉はいった。倉田軍曹も雨にうたれながら、闇のなかを見た。平地のあたりで、銃火がひらめいた。

「まっ暗闇だし、小隊長、小隊は、ここで本隊を掩護えんごしましょう」

「そうするか。おれは兵隊を見てくる」

雨のなかを、靴音が遠くなった。

夜ふけには、敵の銃火はすくなくなつた。雨は降っている。緊張がゆるんだのか、倉田軍曹は土塀にもたれて、ついうとうととした。眼がさめると、夜が明け、雨はやんでいた。雲のあいだに青空もみえる。小鳥が啼いていた。昨夜は気がつかなかったが、屋根が焼けた廟のまわりは木立で、霧に朝陽が筋になっている。倉田軍曹は自分ののぼした脚に外被がかけてあるのに気がついた。彼は見まわした。昨夜のままに、軽機を土塀にすえた渡辺伍長の軍服の背中が濡れていた。

「おい、渡辺……」

呼びかけて立つときに、倉田軍曹はふいにながれ出た涙を片手で頬からはらい、土塀のそばに立っている渡辺伍長の後姿に笑いかけた。

「異状はないか？ 戦闘中に仮眠するなんて、演習中だったら、懲罰ものだよ。隊長は？」

「地形を調べに出てゆかれました」

「おれのことを、何にもいわなかったか？」

「軍曹は疲れてるんだ。そっとしておけ、といわれたですよ」

そこへ、濡れた銃をさげ、雨外套に泥をつけた寺本伍長があがってきた。

「やれやれ、昨夜は、もう、いけねえと思つたぜ。雨は降るしよ。ほう、これは、何の神様だ？ ナムアマダブツ、おかげさまで、昨夜は、命拾いをしました……」

寺本は片手で拝む真似をした。双眼鏡を手にした江藤小隊長があがってきた。

「よし、小隊、前進！ 敵は退却したらしい。本隊へ合流する」

廟の丘を降りる前に、倉田軍曹は渡辺伍長の肩を叩いた。

「おい、渡辺、昨夜は、有難う」

渡辺伍長は何のことかと考える顔をしたが、おとなしく笑った。「いや、軍曹どのがよく眠っていたもんですから、濡れるといけないと思って……」

有力な敵を撃退した本隊に合流した江藤小隊は、小川のほとりで飯をたべた。

弾薬箱に腰かけて煙草を吸っている渡辺伍長のほうへ倉田軍曹がゆくと、渡辺は写真をながめていた。

倉田はその肩をたたいた。

「おい、渡辺、おまえの恋人の写真か？ 美人じゃないか。どれ、見せろ」

渡辺は不機嫌に黙って写真を胸ポケットにしまった。べつのことをいった。

「軍曹どの、昨夜は、自分はもう、やられるかと思ったですよ」

軍曹は部下の前にあぐらをかいた。

「そうだな。小隊は、孤立してたものな。攻撃をくったら、全滅だったよ」

渡辺伍長は改まった口調になった。「倉田軍曹どの、もし、自分が戦死したら、頼みたいことがあるんです。渡辺には、姉がいるんです。いまのは姉の写真です。自分のことを、この姉に話してやってほしいんです」

「渡辺、縁起でもないことをいうなよ」

渡辺伍長は笑った。「どうも、自分は生きては帰れない気がするもんですから……」

「それは、おれだって同じだよ」

「姉の住所は、これです」

渡された紙片をみて、倉田は渡辺正一の顔を見た。それには東京市向島区寺島町七丁目四十六番地（二部）菊川うめ方、渡辺ユキと書いてある。倉田は若い部下の横顔を見てきた。

「寺島町というと、玉ノ井じゃないのか？」

渡辺はうなずいた。「ええ。姉は、十年前から、十八の時から、この商売をやっているんです。自分らきょうだいは、姉の力で大きくなったんです。自分の家は小作人で、親父の体が弱くて、きょうだいが多くもんですから……。自分は長男です。倉田班長どの、自分には姉の借金を払う金は、とてもできそうもないです。戦地へ来ても、このことが気になって……」

「わかったよ。このことは、誰にもいわんよ。玉ノ井か。おれも、一度か二度、いったことがあるよ。なに、その姉さんも、いい亭主をみつかるよ」

「鈴木上等兵みたいな男をみつけるといけれどな。もし、自分が戦死したら、その一時賜金で、姉の借金の一部でも返してやりたいんです」

「解ったよ。そのように手続きをとってやるよ。おおい、渡辺、おまえ、変だぞ。さっきから、縁起でもないことばかりいってるぞ」

色白な伍長は微笑した。「ここは、戦場ですから」

「渡辺、元氣を出せよ。寺本をみる。奴は戦争にきて張り切つとるじゃないか」

水藻が透いてみえる川を見ている渡辺正一に、倉田は慰める口調で話した。

「渡辺、おれの家も小作人だよ。家は、多摩川のそばだ。おれのおやじは、怠け者でな、遊ぶことばかり考えてるんだ。おふくろが、八百屋をやっているんだ」

彼は町はずれの埃っぽい街道沿いにある藁葺き屋根の家と、しなびた茄子や胡瓜をならべた小さな店を思い出した。ちびた藁草履をはいた自分は、町の小学校へかよった。「おれは、小学校の成績はよかつたよ。運動会でも、いつも一等賞をとったよ」

しんみりと話す倉田の肩で、一本の金線と、二つの星が夕陽に光った。「同級に、大野健太郎という大地主の息子がいたよ。みんなは、健太郎さまと呼んでいたがね。おれは、大野君と呼んでやったよ。

健太郎は、おれのことを、徳、徳って、呼び捨てにしやがる。小作の息子だもの、仕様がないな」

彼はくわえた草を吐きすて、白い歯をみせて笑った。

「健太郎は、徳平は生意気だといって、おれを野球のチームに入れてくれねえんだ。おれは、ピッチャーで、いい球を投げたんだ。おれは、布でグローブとミットを作ったよ。棒を削って、バットをこしらえたよ。それで別の仲間で、チームをつくってやった」

彼は中国大陸の遠くに眼をやり、いつもに似合わない感傷的な口調になった。

「おれは、藁草履か、指の出たゴム靴をはいてたんだ。おれは、中学へいきたかったよ。渡辺もそうか。大野健太郎は、大学にはいったよ。おれが田園で草とりをしてると、角帽をかぶったあいつが通るんだ。おれは百姓をやめて、現役志願をしたんだ。一生、兵營で暮すつもりで、軍隊にはいったんだ。おれは、外出日でも、村には帰らなかつたよ。出征のときにきてくれたのは、おやじと、おふくろだけさ……」

倉田軍曹の日焼けした顔には、とつぜんに怒りもえた。肉のうすいこめかみに血管が浮き出た。その怒りは、縁側にあぐらをかいて投網とあみの手入れをしている白髪頭の父と、町会議員の大野の旦那とにむけられた。その旦那に這いつくばるように頭をさげる父、トラホームで眼を赤くした母。白壁の塀をめぐらした大野の家と、白緋がすりに黒緋みの羽織を着て、パナ帽子をかぶった大野の旦那の八字髭を生やした顔まで、かれの記憶の底から鮮明にうかびあがった。

ここが中国の戦場であることを思い出した倉田軍曹は、立って、いつもの口調で命令した。

「渡辺、弾薬を調べておけ」

「はッ」

伍長も立って、立ち去る軍曹に敬礼をした。

## 5

南京までは、あと二十キロだ。敵状偵察の任務を受けた江藤小隊は、行動を秘匿しながら、本隊の数

キロ先を進んでいた。畑のなかの道で、一人の女に出会った。農民の女房とみえる女は、町にでもゆくのか、晴衣らしい桃色の縹子の大袷を着、黄土の埃のたつ道を大きな髻を振って歩いてた。風呂敷包みをさげ、腕にかけた籠に一羽の家鴨といくつかの卵をいれていた。枯れた高梁畑の向うに、部落の土壁がみえる。江藤少尉は女を呼びとめた。この辺の地理と、目標の町へ通じる道をたずねた。はじめは慄えていた女は、少尉の笑顔を見て、くわしく教えた。

「謝々、太々……」

少尉は軽く敬礼してはなれた。

「小隊長……」倉田軍曹がそばへきた。「この女を、放していいんですか？」

江藤少尉はしばらく考えていた。眼鏡をかけたその顔を、倉田軍曹は非難する眼でみつめた。片腕に籠をかけた女は不安な顔になった。その日焼けした血色のいい頬には、ほつれ毛が汗でくっついていて、髪油と、ふくらんだ胸のあたりからは乳のにおいがした。

「しかしだな、軍曹……」

「小隊の行動は、秘匿する必要があります。本隊がきます」

江藤少尉をみつめる倉田軍曹の茶色がかった細い眼は、「小隊長は、作戦要務令を知らんですか？」と口を開いている。高梁畑の脇に身を隠した兵隊たちも、どうなることかと見守った。

「わかったよ、軍曹……」江藤少尉にも倉田軍曹のいうことはよく解った。どうしようもない。ここは戦場だ。少尉は横をむいた。「……お前に任せる」

少尉はそこをはなれて、白い雲の流れる空を見ていた。倉田軍曹は私物にして持っている十四式拳銃をひき抜いた。女はガクガクと膝をつけて手を合わせ、何度も頭をさげた。早口でいった。「私には、子供がいます。家で小孩児が待っています。私は、悪いことはしません……」

女がなにをいっているのかは、軍曹にも兵隊たちにも解った。軍曹は女のこめかみに銃口をむけ、眼



をつぶつて撃った。血のたまりに、女はうごかなくなった。逃げだした家鴨が高粱畑で啼きたてた。

「おい、こいつを隠しとけ」

拳銃を腰のサックにいれ、倉田軍曹がいった。兵隊が女の桃色の布靴を両手にもってひきずった。死体は黄色い土の上を両手をひろげてひきずられていった。

銃を腕にのせ伏せた兵隊が、横に話した。

「やるな。班長は……」

印刷工だった木村上等兵が大声でいった。「仕方がねえさ。おれたちは、盆踊りにきてるんじゃないねえんだ。あの女は、運が悪かったんだ。ほんとにあの女がしゃべったら、後からくる奴らは全滅だもんな。なあ、おい……」

倉田軍曹は木村上等兵をふりかえり、青い顔で笑ってうなずいてみせた。

「小隊は、本隊に連絡のうえ、あの山の陰で、夜まで待機する。町は近いから、警戒を厳重にしろ」

江藤少尉が気をとり直した風に命令した。兵隊の一人が出発しがけに、籠の卵をポケットにいれた。

戦線は南京に近づいた。焼かれた部落の立木に、日本兵が三人、縛りつけられていた。斥候に出て捕まったらしい。戦線はそのように入り組んでいた。三人の日本兵は眼玉をえぐられ、耳と鼻をそがれた赤い顔を垂れていた。兵隊に知らされて駆けてきた倉田軍曹は縄をとき、涙をこぼし歯がみをしていった。「ちき生ッ！ お前らの仇はうってやるからな。待っている。つらかったらうなあ」

軍曹は穴を掘らせて三つの死体を埋めると、煙草を一本ずつ供え、合掌した。こんな倉田軍曹に小隊の下士官や、兵が心服するのは当然といえた。一方で、彼らは口にこそ出さないが、陸士出ではない大学出の甲幹の江藤少尉を、内心では軽くみていた。おとなしいインテリ少尉を尊敬しているのは、機関銃手の渡辺伍長と江戸っ子の寿司屋上等兵ぐらいのものだ。倉田軍曹はこの小隊に配属された初めから、一つ年上の甲幹出の少尉には対立意識をもっていた。馬喰うあがりの寺本伍長は、おおぴらにいった。「う

ちの小隊は、倉田軍曹でもっているようなもんだぜ。大学出に、戦争ができるかよ」

そんな反感や陰口を知っているのか知らないのか、少尉は黙々と自分の任務にしがっている。あたえられた運命にしたがっているといったほうがいいかもしれない。

日本軍は、三方から南京に迫った。堅固な城壁にかこまれたこの首都は、蔣介石の抗日作戦計画で、昭和十年から五千万円の金をかけ、一個の巨大な要塞と化していた。市街をとりまく山や丘には、ヘトンで固めたトーチカが何重にもつくられている。

なかでも西門外にある寺院の名所として知られる雨花台は、近代式の要塞陣地で、日本軍の攻撃を釘づけにした。江藤清少尉の指揮する江藤小隊も、この小高い丘の一角にとりついたまま、まる一昼夜のあいだ、進めないでいた。敵のトーチカのコンクリートはまだ生乾きで、近くで敵の将校の号令や兵の話し声がきこえる。間断なく撃ち出される砲火や照明弾が、急いで掘った壕にいる味方の将校や兵隊の鉄帽を照らしだす。まわりでは、機関銃の火がひらめいた。戦車砲や擲弾筒の空気をひき裂く音。そのなかに、チャルメラに似た中国軍のラッパの音がまじる。

「おい、にぎやかだな」

壕の上に軽機関銃をすえた渡辺伍長に、倉田軍曹がいった。その顔を青白い光が照らした。緊張した顔の若い伍長は無言でうなずき、軽機の引金をひいた。倉田徳平軍曹には戦闘中の快い陶醉がおこった。彼は愛用の私物の拳銃を下腹の帯革にはさみ、小銃の狙いをつけた。

「おうい、兵隊……」近くの壕で、声がした。部隊長だ。五十半ばの大佐はいった。「お前ら、犬死にをするな。頭を出すなよ。戦争は永いぞ」

倉田軍曹はさげんだ。その頬に涙が光った。

「聯隊長どの、さがつてくください。敵は、自分らがやります」

近くで迫撃砲弾が炸裂した。頭を伏せた軍曹が土埃りのなかで顔をあげると、渡辺伍長は軽機の上に  
おおいかぶさっていた。

「おい、渡辺、どうした？ 大丈夫か？」

抱き起した渡辺伍長の顔の半分がつぶれ、黒い綿みたいなのが垂れていた。倉田軍曹は気をとり直  
すと、血でべとべとする軽機を持った。

その夜、犬死にをするなどといった部隊長も戦死した。

丘が白んでくる頃に、敵の抵抗はやんだ。いちめんの霜だ。兵隊は壕から躍り出て、各個に前進をし  
た。その靴の跡が黒く点々とつづき、砲車や戦車も畑の霜柱をくぐりながら、輻の道をつくった。

丘の上で、兵隊がどなった。

「おうい、見ろ！ 城壁だ。南京へきたぞ！」

丘にあがった江藤少尉の双眼鏡にも、市街をとりまく城壁と、銃眼の向うにうごく灰色の軍服が映り、  
その怪物のようにならぬ城壁は、靄のなかに、しだいに姿を現わしてきた。

## 二章

### 1

昭和十二年（一九三七年）の七月七日に、蘆溝橋ろこうきょうで、日本と中国との戦争がはじまった。ひと月後の八月九日には、上海シヤンハイで海軍陸戦隊の大山大尉が射殺されたことから、戦争は上海にもひろがった。

日本軍は華北の山岳地帯と、上海のクリーク（運河）で戦っていた。

十一月の初旬に、上海派遣軍が正面から攻撃し、一方で「覆面兵団」といわれた柳川兵団が杭州湾に上陸して中国軍の側面をつき、後方を遮断したときに、南京の陥落はもうきまったのも同様であった。

南京の市内は、前線から退却してくる軍隊や、戦火に追われる避難民で混乱した。

国民党政府は、武漢に移っていた。

外国の居留民は、十一月中に、揚子江を船でくだって避難していった。各国の外交機関も引揚げた。そのあとに、二十何人かの外国人がのこった。この人たちは、大使館や領事館の勧告にしたがわないで、自分たちの意志で、南京にとどまったのである。これらの外国人は、「南京市難民区国際委員会」を組織した。委員長には、ドイツ人のヨーン・ラーベがなった。彼はシーメンス洋行の支配人であった。ほかに委員には、宣教師、大学教授、医師、商社員、女教師などがいた。

これよりさきに、上海で、ピサン神父が南市に難民区を設け、日本軍と交渉して二十五万の難民を保

護した。南京の外国人も、これにならおうとしたのである。

国際委員会の目的は、「日本軍と中国側の双方に交渉して、難民区の中立的地位を承認させ、区域内には、軍隊の駐屯、軍事機関の設立をおこなわず、この地区を、南京に残留した二十万市民の避難所とする事」であった。とりあえず市の東南地区を難民区に設定したが、広大な区域だし、柵のようなものがあるわけでもない。それでも安全地帯だということで、戦火におびえた避難民はここにあつまってきた。難民区は中山路と上海路に面した二哩平方の地域で、空地もあるが、大体は家屋や店が密集している。南京市長の馬超俊は、十二月一日に、「難民区」の行政責任を、この外国人の「国際委」に交付し、治安のために、四百五十名の警察官を派遣した。そして三万担ダの米、一万担のメリケン粉、ほかに塩、助成金八万ドルをあたえた。

南京は、首都衛戍えいじゆ総司令の唐生智將軍が守備していた。唐総司令は難民区に指定された地域から軍事施設をとりのぞいたが、それでも西南の角には、小型の高射砲陣地がまだ残っていた。

日本軍と中国軍は、市外の雨花台の陣地で戦っている。これはのちに、近代戦史上、ベルダンにつぐといわれた激戦であった。

十日には、紫金山に日本軍砲兵隊の観測気球があがった。南門の外の重砲陣地からうつ砲弾が、城内の各所に落ちはじめた。難民区の中かの大きな建物は、逃げてきた避難民でいっぱいになった。街のほうほうでは火災がおこっている。

この日に、日本の中支派遣軍司令官は、中国軍に不戦撤退を勧告し、「日本軍は、抗日分子に対しては苛酷なる態度をとるが、非武装の良民と、敵意なき中国兵に対しては、寛大なる態度をとる」と布告した。

その回答がないので、日本軍は、十日の午後一時より、南京城の総攻撃を開始した。

十二日の午後になると、前線の中国軍は総退却をはじめた。武器をもった敗残兵が、南門から城内に

逃げこんできた。

「中山陵は砲撃すべからず」という命令が出ていた。日本軍はこのために作戦上の不利をも忍ばなければならなかった。

日本軍の飛行機が低空をとんで、街に伝單を撒いた。それにはこう書いてあった。

〔日本軍は、善良なる市民を極力保護し、人民を安居樂業せしむ〕

前線では、まだ激戦がおこなわれている。中国軍のチェッコ機関銃の軽快な音にまじり、日本軍の重機関銃の重量感のある音が近づいた。南京守備の唐生智將軍は、外国人の國際委員會を通じて、日本軍に一時休戦を申し入れてきた。ドイツ人のシュペリングがその交渉にかけた。しかし彼には日本軍と連絡がつかないでいるあいだに、その夜、唐生智は南京から脱出した。市内は電燈が消えてまっ暗になり、水道もとまった。

中国軍の將兵は、揚子江を渡って逃げようとした。埠頭（シャーク）の下関や江岸は、彼らが棄てた銃や弾帯、軍服などで足の踏み場もないくらいで、トラックや貨物などが燃えている。揚子江に通じる城門はすでに閉鎖されていた。日本軍に追われる中国兵は縄やゲートルや布などを手当り次第につないで城壁をよじのぼって逃げようとし、なかには落ちてうごけなくなる者もいた。江岸では、狂気したような兵隊たちが民船におし合い、転覆する舟もあり、中国兵は濁流にのまれた。木筏を組んで渡河しようとして、やはり同じ運命にあう者もいた。

このあいだにも、日本軍の砲弾は、城壁や市街に煙をあげた。

城内から脱出できなかった敗残兵が続々と難民区に逃げてきた。なかには武器をもっている兵隊もいた。

## 2

国際委員会の事務局の会議室では、十二日の午後から、会議がひらかれていた。

この事務局は中山路の大通りに面していて、ここはもとは張群外交部長の公館であった。白亜の二階建ての瀟洒な建物で、正面に円型の階段が張り出している。

会議室で、ヨーン・ラーベ代表以下十五人の委員は協議した。ラーベの後ろの壁には、蔣介石の写真がかけられている。

もう二時間にもなるのに、なかなか会議はまとまらない。委員の意見は、二つにわかれていた。ラーベ委員長は初めにこういった。

「一般市民を収容する難民区に、敗残兵を入れることは危険です」

「ラーベさんの意見に賛成です」

同じドイツ人のシュベリング技師がいった。スタンダード石油会社のチャールス・リグスがうなずいた。金陵大学のルイス・スミス教授も、眼鏡をかけた顔で大きくうなずいた。

「彼らは、武器をもっていますからね」

ラーベの隣にかけたミルス神父は、ただひとり、最初から黙ってその黒い袖をテーブルの上に組んでいた。前には、日本軍の伝単が一枚おいてある。

「神父、あなたの御意見を聞かせてください」

ラーベが催促した。神父は口をひらいた。

「日本軍の軍司令官は、敵意なき中国兵にたいしては、寛大な態度をとると布告しています。この伝単にもあるとおり、日本軍の仁慈な処置を、私たちは期待しましょう」

茶色のとがった顎髭を生やした痩せた顔で皆を見まわし、ミルス神父は同意をもとめた。

委員たちは黙りこんだ。それからそれぞれの考えをいった。ラーベ委員長は黙って聞いている。こんな会議をひらいている窓の外にも、持てるだけの荷物をもった避難民があつまってきた。その群衆のさわぎと、遠くで聞こえる機関銃の音や、砲弾の炸裂する音に、委員たちの言葉はとぎれがちになった。

「上海では、どうだったのでしょうか？」

たった一人の婦人委員のミニ・ボートリンが亜麻色の断髪を細い指でかきあげ、碧い眼で見まわした。このことについては、知っている者はいなかった。石油会社の駐在員でいちばん年長のデンマーク人のハンソンが、とがった禿頭を左右にまわし、ハンカチを出して音をたてて涙を<sup>はな</sup>かんでから、かすれ声でいった。

「しかしですね。実際問題として、彼らを市民のなかからさがし出すことは、不可能じゃないですか？」

ミルス神父がうなずいた。「迷っていても、しようがありません。皆さん、私たちはここで、もう一度、上海で、ピサン神父がやったことを思い出そうではありませんか」

赤十字代表であるメージス牧師もうなずいた。

「よろしい。いつまでも議論していてもしょうがない。私が決をとります」最後にラーベ委員長が肥った赤ら顔をあげた。「私の責任で、難民区に中国敗残兵も收容することにします」

ミルス神父が緑色の眼をあげた。

「いや。責任は、委員の全部にあります。私たちは、神の思召にしたがうだけです」

この十六人には、このときの決定が、のちにどんな重大な意味をもつかは、判らなかつた。

中国兵のなかには、便衣に着かえ、市民にまぎれこんでいる者もいた。その数も不明である。

委員は町のなかを説いてまわった。避難民は道路にまであふれている。ミルス神父は軍服の男にいった。

「武器をすてなさい。非武装ならば、私たちは、あなたたちの生命を保証しよう。この難民区には、一



梃の武器もおいてはなりません……」

飛行機が低空をとんだ。

せまい道路に腰をおろした避難民のなかに、ミルス神父は四人の兵隊をみつけた。若い四人は小銃をしっかりと抱えこんでいた。神父は中国語で、「武器を渡すように……」といった。

「いやだ！」頬の赤い一人が首をふった。

「君たちは、何処の出身かね？」神父はたずねた。

「広東です」中学生みたいな別の一人が答えた。「僕らは郷里から歩いてきて、抗戦に加わったんです。この銃は渡せません」

「それなら、君たちは、ここを出ていってもらいたい。ここは、非武装を宣言した中立地区です。君らのような兵隊がいたら、ほかの全部の人が迷惑します」

ミルス神父はやさしく諭した。同郷の四人の兵隊は相談をしていた。四人とも不承不承に銃を渡し、肩から弾帯をはずした。

別の場所には、一人の下士官がいた。この男も大きな拳銃を腰にさげていた。がっしりした体格で太平洋の島の土人のように精悍な顔をした男は、北方出身だと話した。下士官はミルス神父にきいた。

「牧師さん、自分らは、どうなるんですか？」

「それは、私たちに任せてください」

「ほんとに、大丈夫ですね？」

下士官は黄色い飾り紐のついた拳銃を渡すときにこう念をおし、ミルス神父の眼をみつめた。下士官の黒い眼には、諦めと不安とがまじっていた。ミルス神父は茶色の顎髭を片手でなぞ、うなずいて微笑してみせた。

十三日の明け方になった。冬の霨もよと火災の煙とが、兵士のほかには人影のない市内をうす暗くしている。火山の噴火のような三条の大きな黒煙があがっていた。

南側の城壁を占領した日本軍は、光華門、中山門、中華門を破って市内に突入した。メインストリートの中山路では、はげしい市街戦がつづいている。

中華門のほうで、日本軍の先頭部隊を見たという中国人の知らせで、ラーベ代表とミルス神父の二人は、急いで上海路へいった。

そこで、英語の話せる若い将校に、日本軍にあてた最初の公式文書を手渡した。

### 3

それから二時間後の午前八時に、江藤小隊は上海路の交通銀行大楼を占領した。そこに逃げこんでいた中国兵は、外国人の宣教師がいったとおり、もう戦意を失っていた。戦死した渡辺伍長に代って軽機関銃をもった寺本伍長が先頭に立ち、中国兵を建物の外に追い出した。八十三名の捕虜は彼らがいっている巻脚絆まききょうはんやそこらにあった綱で後ろ手にしぼり、前の道路に坐らせ、兵が警戒した。

私物の拳銃をもった倉田軍曹は建物のなかを調べてまわった。中国兵の戦闘帽や小銃や軽機関銃や血に染んだ葉莢やうきょうが散乱し、手榴弾もころがっていて、危険だ。レコードをのせた大きなラッパの蓄音器もあった。窓際に土嚢がわりに積まれた麻袋を、軍曹は短剣で切り裂いてみた。小柄の軍曹は、大声で兵隊を呼んだ。

「おうい、みんな、きてみる。こりゃあ、米だぞ！」

「なに、米？」

「班長どの、ほんとですか？」

やはり髭がのび頬の肉の落ちた兵隊たちが集まってきた。彼らはこぼれた白米を両手ですくった。

「米だ。おい、米の飯がくえるぞ！」

倉田軍曹がいった。「命令がありしたい、炊きんだ。裏に穴を掘って、薪と水を探しておけよ」

本部へやった二度目の伝令がもどった。

「江藤小隊は、現地点で別命を待て。敵兵は肅清せよ」との下達だ。命令書を片手にもった江藤少尉は、癖で何度も片手で眼鏡をおしあげた。入口のひろい階段に立った少尉は、「おうい、倉田軍曹。誰か、倉田軍曹を探してこい」といった。

拳銃をもった倉田軍曹が建物から出てきた。彼の細い茶色の眼は、少尉の手にある紙片にとまったが、せかせかした口調で、別のことを報告した。「何ですか？ 隊長……。少尉どの、食糧をみつめました。たいへんな米です。奴らは弾丸除けに米袋を使っていたんです。兵隊に飯を食わせたいんですが……。地下室には、罐詰や支那の酒などもあります」

「軍曹、それよりも、これを読んでみる」

命令書を読み、倉田軍曹も考えていた。

「その肅清せよ、という意味だかな。軍曹は、どう考える？ もう一度、訊きにやるか？」

「その必要はないでしょう。わかっています。よし、自分がやります」

「待て、倉田。まだ、おれの意見はいつてないじゃないか……」

江藤少尉は道路の植込みの内側に並んで腰をおろしている八十何名かの捕虜のほうを見た。壁にもたれて膝を立てたり足を投げ出したたりした彼らは、通りを進撃してくる日本軍部隊をうつろな眼で眺めている。なかには脚に血に染まった繃帯を巻いている者もいる。江藤少尉は学生時代に国際法で習った「ハーグ条約」を思い出した。捕虜の取扱いは国際法で定められている。この戦意を喪失した無抵抗な

捕虜を、どうしろというのか？ 捕虜を見ると、みな同じ東洋人の顔で、今朝まで、はげしく抵抗していた敵兵とは思われない。江藤少尉は決断にせまられた。軍曹と話している自分の顔に、捕虜たちの眼がそがれているのを感じた。少尉には自分の意見がいえなかった。

「小隊長、早く片づけましょうや。兵隊は飯を待っています」

倉田軍曹はじれったそうにいい、捕虜たちを、まるで自分と同じ人間ではないものを見るような眼でみた。江藤少尉は一つ年下の現役あがりの下士官から眼をそらした。この軍曹のなかに、自分の言葉や力ではこわされない頑強な何ものかを感じた。戦闘帽をきちんと被った眉の濃い長身の少尉は、ひろい石の階段に立っていた。そばにいる倉田軍曹から或る圧迫感をうけた。高梁畑の道で中国女を殺したときいらい、少尉は、戦場では、この軍曹には敵わないという変な潜在意識に悩まされていたのだ。

それでも江藤少尉はまだ決断をくだすことができなかった。この一カ月あまりの戦闘で、八十名もの捕虜をつかまえたのは、これが初めてだ。命令書が「粛清せよ」というのは、抵抗する敵兵にたいしてのことかもしれない。「殺せ」とは書いてない。この自分に、無抵抗な捕虜を殺せとは、いくら何でも命令してこないだろう……

「おい、篠原……」少尉は若い一等兵を呼んだ。「おまえ、本部へ伝令にいったかい」

少尉は紙に書いた。「捕虜八十三名、本部へ送ります。部隊長殿の御指示を頂きたし。江藤清少尉」銃をさげ、かけてゆく伝令を見送っていた江藤は、ふと倉田軍曹を見た。軍曹は笑っていた。自分からかい、軽蔑している笑いにみえたが、江藤はそんなことはかまわず、伝令をやった城門のほうを度々、見た。

伝令がもどった。命令書には、

「その必要なし。その場で、粛清せよ」と書いてある。江藤はそばにいる軍曹に、黙ってその紙を渡した。

「倉田、おれは、これから報告書を書くからな」

倉田軍曹は待っていたようにいった。「は、わかりました。隊長、自分に任せてください」

軍曹は敬礼をして、建物にはいった。江藤少尉も捕虜を見ないで、後からはいった。背中に市街の静寂が急におしよせてくる感じがした。その妙に静まりかえった外から逃げるようにドアを開け、小部屋にはいると、ドアを閉め、ノブをまわした。外のものはきこえなくなった。彼は図囊から軍用箋を出し、ナイフでいいねいに鉛筆をけずった。

「おい、お前ら……」

裏庭に溝を掘り、薪を割って、笑ったりしゃべったりして、にぎやかに飯盒炊さんの用意をしている兵隊たちを、倉田軍曹は呼んだ。

「飯には、まだ、早いぞ。第一分隊、それに寺本伍長、お話も、きてくれ。みんな、銃をもってこい。弾薬もだぞ」

兵たちは顔を見合わせた。寺本伍長がきいた。

「何です？ 倉田軍曹……」寺本は軍曹の顔を見て、うなずいた。「そうか。やるのか。よしきた。おい、お前ら、何をグズグズしてる？」

武装して整列した二コ分隊の兵隊に、倉田軍曹は重々しく命令した。

「捕虜を、十人ずつ連れてこい。残った捕虜は、騒がぬように警戒しろ。寺本、抵抗したり、逃げたりしたら、射つていいぞ」

彼は先に立って、裏庭から空地のほうへ出ていった。

小部屋では、少尉は軍用箋に、「捕虜、ハーグ条約、戦争……」と落書きしながら、一方で外に耳を澄ました。立って、せまい室を歩きまわった。

寺本伍長は、捕虜のところへいった。

「お前ら、こい！」

と、十名を縦に並べさせた。

手を前や後ろでしばられた中国兵たちは青ざめた。それでも彼らは裏の空地までいった。そこには銃に剣をつけた二十人ほどの兵隊と軍曹がいた。逃げ道にも兵隊が立っている。十人の中国兵は観念したようだ。かれらの顔を、小柄な軍曹は一人ずつ見てあるいた。前に立っているのは、さっきまで戦っていた敵兵だ。軍曹は、顔の半分がぐちゃぐちゃになった渡辺伍長や、今までに戦死した部下や、昨夜の戦闘で、名誉の戦死をしたという老聯隊長の顔、部落の立木にしばりつけられ、真赤になった顔を垂れていた三人の斥候と、その三人の眼玉をくりぬかれ、鼻をそがれた化物みたいな顔をはつきりと思いだした。倉田軍曹の細い茶色の眼は別人みたいになり、彼はまるで気でも狂ったようにさげんだ。

「きさまらだな。日本の兵隊を殺しやがったのは……。おい、お前ら！」

軍曹はやはり青ざめ、途方にくれた顔で立っている部下をふりかえった。

「何だ、お前らの、その顔は！ 昨日までの戦闘を忘れたのか？ いいか、お前ら、刺突しとつの要領でやれ。だてに銃剣術を習ったんじゃないぞ。渡辺伍長や、死んだ戦友を思い出せ。よし、構え！ 戦友の仇かたきだ！ 一歩前え、突けッ！」

兵隊は号令どおりにやった。中国兵の灰色の軍服の胸は血で真赤になり、彼らはわからない言葉でわめき、憎悪の眼で日本兵をにらみつけ、なかには胸に刺さった銃を掴む者もいた。彼らは重い音で倒れた。手足が痙攣けいれんした。綿入の服から銃剣が抜けなくて片足で踏ん張っている初年兵に、寺本伍長がそばから気合をいれた。

「腰ぬけ野郎！ それでも、貴様は日本の兵隊か？ とどめを刺すんだ、とどめを……。この腑抜け野郎！」

倉田軍曹の細い眼はすわっていた。

軍曹は倒れた敵兵のあいだを歩きまわった。それが弱気になった兵隊たちには頼もしくみえた。軍曹は検死でもするようにゆっくりと歩きまわり、死体の顔を見たり、生きてはいないか靴でうごかしてみた。軍曹は考えた。中国人を殺すなんて、やってみれば、何でもないことだ……。軍曹は自分に弁解する風につぶやいた。「おれは戦場にいるんだ。盆踊りをしにきてるんじゃないんだ……」

軍曹は青い顔をあげた。

「おい、こいつらを見えないところへ片づけろ。つぎを連れてこい」

つれてこられたつぎの十人には、血溜りを見て動けなくなる者も、嘔吐する者も、顔をあげ唾を吐きかける兵士もいた。倉田軍曹はぼんやりして立っている部下から、銃をとった。

「よこせ。おれが模範を示してやる」彼は唾を吐きかけた中国兵の前に立った。「日本の兵隊の眼玉をくり抜きやがったのは、お前らだな。そんなに死にたいのか？ よし、おれが殺してやる」

彼は足を前後に踏ん張り、銃剣術で教えたとおりの型で、銃剣をまっすぐに突き出した。そのとがった先は服に刺さるのが判る速さで胸の心臓部にとまり、灰色の服に血の色がひろがり、剣を抜くと、相手は重たい袋のように倒れた。

大男の寺本伍長は髭面にうす笑いをうかべていた。

寺本寅吉は足許に倒れてまだうごいている敵兵を見おろし、そばの兵隊にいった。

「軍曹も、気が小せえな。見損ったよ。なにも、お題目をならべることはいらんじゃないか。おれは、牛や馬を殺したことがあるぜ」彼は靴で死体を蹴った。「こいつらも、牛や馬だと思やいいんだ。こいつらは、人間じゃねえ。チャンコロだ。おれたちは、日本人だ。お前ら、こいつらに、日本人とはどういふもんかみせてやれ」

血を見ても顔色ひとつ変えないのは、この大男の伍長だけだった。

一時間後に、倉田軍曹は小部屋のドアをノックした。

「倉田軍曹です。はいります」

「ああ、はいれ」

倉田軍曹がはいると、江藤少尉は机に向っていた。振り返ったが、立っている軍曹から眼をそらした。

「隊長どの、命令どおり、捕虜を全部、処分しました」

「そうか……」少尉は下士官から眼をそらしていた。「あとはどうした？」

「片づけました。案外、簡単にすみました」

二人はしばらく黙っていた。少尉はちらと軍曹を見ると、眼鏡をはずし、書きかけの軍用箋の上においた。突つ立った倉田軍曹は、自分をちらと見た江藤少尉の眼に嫌悪と侮蔑があつたのを本能的に感じたが、やはり子供の頃からのように薄笑いをその骨ばった頬にうかべて、椅子をひきよせた。

「いま、飯を炊かせています」

「そうか……」眼のあいだに眼鏡の蔓の赤い痕がついた少尉はまた何か問いかけるように軍曹を見たが、何もいわなかった。江藤少尉には、椅子にかけて微笑している倉田軍曹が、たったいま、多くの人間を殺してきた男とはみえないのが不思議に思われた。そんな眼で軍曹を見たのである。

倉田軍曹はせまい額に略帽の痕がついた日焼けした痩せた顔で白い歯並をみせ、江藤少尉に笑いかけた。

「江藤隊長は、英語がうまいですな。さっき、自分はおどろいたですよ」

高等小学校出の下士官は尊敬の眼で少尉を見ると、煙草に火をつけた。八十何名かの捕虜を殺したことは、もう忘れていくらしい。



「ああ、おれは……」母がクリスチャンで、小さい時から、日曜学校に通わされたんでね……と説明しようとして、少尉は口をつぐんだ。おれは、大学では、外交官試験の勉強をしていたんだ。江藤はふと自分の回想に落ちこんだ。法文学部の教室と、国際法の講義をする教授、ボート部の艇庫と、夏の陽にきらめく川と葦、葦切あしきりの声、三番を漕いでいる自分……

前の椅子にかけた軍曹が、少尉の顔をみた。

「今朝のあの外人、ナチスですか？」

「そうらしいな。いや、ナチスだ」

少尉はあわてて答えた。二人はだまりこんだ。二人はそれぞれに考えていた。江藤少尉はこれまでは勇敢で上官に従順だと思っていた倉田軍曹に、別のかかれた一面があることを知った。倉田軍曹も、この大学出の少尉は、自分らとはどうやら違った種族の人間であるらしいことがほんやりとわかってきた。彼は心でつぶやいた。この少尉は、どうも、おれにはよくわからん……。

「じゃ、隊長どの、飯は持ってこさせます」倉田軍曹は煙草を踏みつぶして立った。

「いや、おれがゆく。あまり食いたくないんだがな」

出てゆく軍曹を少尉は呼んだ。「おい、倉田、いま、昨夜の戦鬪の報告書を書いていたところだよ。お前と寺本伍長の功績は、抜群だと。二人の働きで、部隊は南京突入の突破口を開いたとな」

「はッ」

倉田軍曹はドアの前で、不動の姿勢をとった。「江藤隊長どの、自分は有難いであります」  
倉田軍曹は感激して泣きそうな顔になり、敬礼して出ていった。

江藤少尉は、兵隊たちが何ごともなかったように、飯盒で飯を炊いている裏庭を通って、土塀にかこまれた空地のほうへいって見た。何処へ片づけたのか、八十何名の敵捕虜の屍骸はないが、土に浸みた血がここぞんないことがおこなわれたかを、少尉に教えた。彼は嘔き気がした。それは精神的な反応で

あった。一方では、江藤少尉は何も考えなかった。考える力をなくしていた。彼はどころどころに血の溜りがある空地を歩きまわった。無感情でいられる自分に驚いていた。戦争というものは、人間から考える力をうばうのかしれない。それなら、考える力をなくした人間というものは、いったい何ものだろう？　こんなことを漠然と考えながら、この戦闘部隊の若い小隊長は、空地をあるきまわった。

## 三章

### 1

十二月十四日になると、日本軍の歩兵部隊が陸続と城門からはいつてきた。彼らは隊伍も組まず、疲れて小銃を横に肩にかつき、重そうに靴をひきずっていた。どの顔も髭がのび、軍服は泥と血でよれている。それは彼らが激戦のすえに、この首都にたどりついたことを物語っていた。その横を、戦車、砲車、トラックの列がつづいた。

この日の午前に、中山路にある国際委員会の事務局の前に、草色の乗用車がとまった。参謀の飾り紐をつけた中佐と背広の男が降りた。最初に訪問してきた日本の高級将校に、委員長のヨン・ラーベと、ミルス神父が会った。

中支派遣軍司令部の森参謀は、「自分がきた目的は、この難民区の実状を調査するためである」と語った。

ラーベは各種の文書や資料を出した。中佐と随員はながいことかかって綿密に資料をしらべ、ラーベと、アメリカ人宣教師にいろいろな質問をした。

十数名の外国居留民が国際委員会を設立した動機と、目的。中国側との関係と、その交渉の経緯……中佐は、ラーベ代表の回答を諒解した。

最後に、森中佐はラーベにいった。

「この地区には、きわめて多数の中国敗残兵が潜伏しているとの情報がある……」

相手は戦捷軍の参謀である。ラーベ代表は中佐の気魄に圧倒されて、髭を生やした角ばったその顔を見守った。

「いや、きわめて多数ではありません。また、潜伏しているという言葉も、不適當です。もともと、私たちにはその数は不明ですが、中国兵は、私たち委員の手で、武装を解除されています」

ラーベは困ったことになったという顔で、ミルス神父をふりかえった。神父もうなずいた。司令部の高級将校のきた目的が解った。説明を聞いている中佐の眼には、不信の色があった。それが二人の外国人を不安にさせた。

森中佐はラーベにいった。

「わが軍は、市中の敵兵を排除しなければならない。委員会の手で、それらの中国兵をひきわたすことができずか？」

ラーベは首をふった。「中佐、それは困難です。彼らは軍服を脱いで、一般人と混ってしまったのです」

「いづれ、調査する……」

参謀は肥ったドイツ人の隣にかけた宣教師に眼をむけた。「あなたは、カソリックですか？ プロテスタントですか？」

「ワタクシハ、カソリック神学院ノミルス神父デス。ワタクシハ、三年間、大連ニイマシタ」

森中佐は立って拳手の礼をし、通訳をうながして出ていった。

ラーベ代表と、玄関の階段の上まで送って出たミルス神父は、自動車に乗り軍刀を膝のあいだに立てた中佐を見ると、にわかに不安になった。何か予想できないおそろしい運命が、自分たちのこの難民区の上に掩いかぶさってくるような気持がする。

草色の自動車が続くなつた大通りには、日本軍の隊列がつづいていた。その横を、持てるだけの荷物をもつた男や女や老人が、難民区めがけて流れてくる。

難民区は、南は漢中路、東は中山路、北は山西路（実際は山西路よりさらに北にのびていた）、西は西康路（この道路は金陵女子文理学院の西方で丘を越え、上海路と漢口路の交叉点にいたる）の四本の道路に画された地域に設けられた。そのまがりくねつた西南の境界線は、カソリック神学院の男子宿舎も、そのなかにふくめていた。ミルス神父は、この神学院の居室から、事務所へかよつてきた。

砲弾と銃声と恐怖に迫られて、南京のほとんど全部の市民がこの境界内に逃げこんできたといつてよい。南京市の他の部分はからっぽになり、ここにひとつの人口密集した都市が出現したのである。

町のなかのどの家も満員になつた。一般家屋には十五万人以上、収容所には六万人以上の人がはいつていた。国際委員会は二十五の収容所をつくつた。金陵大学では、すでに三万人を収容した。難民は街の道路や空地にも、藁葺きの掘立小屋をつくつた。この町は藁葺き小屋の世界であつた。金陵女子文理学院には、おもに女と子供を収容した。その女、子供も三千人が九千人にふえ、はいりきれないで、並木路にまであふれている。女たちは幾人かの子供を、手をひいたり抱いたり、服の裾につかませたりし、<sup>グニヤン</sup> 姑娘は丸めた蒲団、衣服や食糧などをいれた大包みを背負い、籠を手にさげ、腰のまがつた老婆は杖をつき、その女たちは途中で休み休みして、安全地帯である難民区にたどりついた。女たちの顔は、後ろから追いかけてくる戦争の恐怖にひきつづいてた。

ラーベ代表は、ミルス神父とリグスをつれて、女子文理学院へいった。

三階建ての建物は、寄宿舎、教室、廊下、ベランダ、階段まで、女や子供らの家族であふれ、荷物で埋まっていた。セメント床の体操場にもぎっしりとすわっていた。赤ん坊が泣き、不安な顔でラーベた

ちを見上げる母親や老婆の頭の上に、使わなくなったバスケット・ボールの網が垂れている。女や子供らは、一日じゅうここに坐り、ここで食い、ここで寝て、その運命に堪えていた。リグスの話では、避難民はたいいてい一日に一食だそうだ。

「いま、大至急、施粥所をふやしています」

リグスはラーベの質問を待たずにいった。

銀の十字架を鎖で長く垂らしたミルス神父は、ながい背中をまげて、母親の乳房をふくんだ子供の唐子頭からこをなげた。

帰りの市街には、どこにでも日本軍がみられた。そこには、革と軍馬と馬糞のにおいがした。戦闘がすんだあとで、兵隊ものんびりした顔をしている。初冬のうすら陽がさす道路や建物の軒下などで、ところかまわず彼らは眠っていた。三人で並木路を歩きながら、疲れた兵隊をいたわる眼ざしで微笑して見るミルス神父の胸には、「いずれ、調査する……」といい残して帰っていったさっきの中佐の言葉がひっかかっている、また、不安になった。

街は、意外に静穏であった。

## 2

江藤小隊は、占領した交通銀行大楼にそのまま宿営していた。

中国兵の小銃や手榴弾や機関銃は庭にひとまとめにし、入口の階段には衛兵を立てた。裏の空地にならべた死体は、倉田軍曹が指揮して近くの原に埋めた。現地点で、別命を待て、との命令をうけた小隊は、南京市内で最初に占領したこの建物に駐屯した。裏の別棟に宿営した。三階建ての表のビルディングには、軍の機関がくるはずである。別棟は階下が車庫だが、自動車はなくて、五十何名が起居するには充分な広さがあった。江藤清少尉は車庫の横の小部屋に、兵隊がさがしてきた鉄製のベッドと机と椅

子をおいて、小隊長室にした。倉田軍曹ら下士官は、兵隊と車庫に寝ている。それでもこれまでの戦場を思えば、別天地だ。戦闘は終わったものの、江藤少尉には仕事如山ほどある。これまでの「戦闘詳報」、警備地区の状況、戦死者の報告、部下の功績、兵員や装備の補充。小隊長室の机に倉田軍曹と向い合っ  
て、これらの仕事を片づけた。

中隊本部はここから半キロほど離れた小学校におかれた。江藤少尉は銀行のなかの調度や装飾品には手をつけるなど嚴重に命令した。大金庫などを警備するのが新しい任務だ。とはいえ、小隊長以下全員は、ここに宿営すると、はじめてのんびりとした気分を味わった。

小隊長室へ篠原一等兵が呼びにきた。

「小隊長どの、風呂が沸きました」

「なに、風呂？」

江藤少尉は倉田軍曹の顔を見た。倉田もげんなりな顔だ。二人は風呂というものの存在さえも忘れていた。

「篠原、どこに風呂があるんだ？」倉田が鉛筆をおいてきいた。

「地下に、暖房のボイラー室があります」商店の息子で、商業学校を出ている篠原は、はきはきとこたえた。「そこに、使用人でもはいったらしいコンクリートの風呂があります。鈴木上等兵どのが、ボイラーを利用して湯を沸かすように、工夫されました。沸くまで、黙っているようにといわれたもんですから……。自分と青木が、水を汲んできました」

「へえ、風呂つきの宿舎か。食糧は倉庫にあるし、本部の魚住少尉には、黙っていたほうがいいぞ。さっそく乗り込んできて、おい、おまえらは、出てゆけだ。小隊長、さあ、どうぞ、お先にはいってください」

「ああ、遠慮はせんよ。いま、剃刀を探してるんだ」

地下室に降りると、鈴木上等兵がボイラーに薪を放りこんでいた。タンクで湯を沸かし、流し込む仕

掛けになっている。

「鈴木、ご苦労だな」

タオルで向う鉢巻をした髻面の鈴木は、服をぬぐ少尉をうれしそうにみた。

「さあ、ゆっくりはいつてくさい。いま、篠原と青木が水を汲んできます」

江藤は浴槽に首までつかった。思わずながい息が出た。「おまえら作業をした者は別として、倉田は風呂にはいる順番をクジ引きできめるそうだよ」

篠原らが石油罐で水をはこんだ。「小隊長どの、湯加減はどうですか？」二人もうれしそうだ。出てゆかずに、眺めていた。江藤も三人に話しかけた。

「篠原、風呂をみると、東京の家を思い出すだろう。お前のところは、商店だったな。何の商売だ？」

「は、洋品店です」

「青木は？」

「はッ、自分のところは、八百屋であります」

「青木、風呂場では、そう、固くならんでいいよ。倉田軍曹の家も、八百屋だとかいってたな」

江藤は風呂からあがり、ゾーリンゲンの剃刀で鏡も使わずに髻を剃った。小気味よく髻を剃ってゆくのに、二人の若い兵隊は見とれている。隊長の胸には黒い胸毛が生えている。青木二等兵がいった。

「隊長殿は、いい体をしていられますね」

罐かまに薪を放りこみながら、鈴木上等兵がいった。「江藤少尉殿は、大学でボートの選手だったんだ。お前ら、知らんのか？」

剃り痕が青い少尉は三人の部下を見た。「お前らがいないと、家では困るだろうな。お互いに無駄死にをするなよ。それから、いつもいとうとおり、日本人としての誇りをもつんだ。おれは、今日、街で、銃をもった兵隊が、中国人の女をからかっているのを見たよ。江藤小隊の者は、あんなことをするなよ」



鈴木が笑った。「大丈夫ですよ。隊長殿、こいつらは、まだ、子供ですから……。おい、お前ら、そんなところにつつ立ってないで、水を汲んでこんかい」

石油罐と棒を持って外に出た二人は、近くの池のほうへいった。内務班で、倉田軍曹や寺本伍長や、古年兵の前で小さくなっているよりも、水汲みのほうが呑気だ。青木がいった。

「おい、篠原、隊長のはりっぱだな」

「隊長の何がだ？」

「隊長のあれだよ。おれのとは、くらべものにならんぞ」

篠原一等兵は怒った眼をむけた。「お前、そんなところを見てたのか？ いやな奴だな」

「江藤小隊長は、服を着るとおとなしいけどよ、裸になると立派だな」

地下室では、二人が話していた。

「鈴木、ひでえ垢だろう。これが、戦塵というのかな」

「ほんとに少尉どの、帰還したら、イの一番に、本所緑町の蛇の目寿司へきてくださいよ。今から、約束しときませぬ」

「お互いに、『帰還』できたらな」

「いやなことをいわんでくださいよ。鈴木が河岸かから仕入れたマグロのトロを食わしますぜ。別嬪のあそこみたいな、とろつとした舌の上でとろけるようなやつをね」

「不潔な表現だな」

「ああ、この手で、もう一度、シャリを握ってみたいなあ。お美津はね、飯の炊き方がうまくてね、お客にほめられるんですよ。少尉どの、なるほど、相当な垢ですね。筋肉が締って、いい体だなあ。自分も、女房とまだ一緒にならない頃、二人で、よく隅田川の辺を歩きましたがね。白鬚橋のところに、大  
学、何ていうんですか？ ボートをいれる……」

「艇庫だよ」

「その艇庫があつてね。学生さんが、ボートレースの練習をしていたね。いいもんでしたぜ」

江藤清は原幸子を思い出した。ふいに寂寥と孤独感に落ちこんだ。この鈴木は妻と繋がって生きているのに、自分にはまだそのつながりがないのだ。「やあ、有難う。流してもらつて背中がせいせいでいいよ」「隊長どの」鈴木は改まったいい方をした。「自分は、江藤小隊に入れられて、仕合わせだと思ひますよその隊で士官学校出の将校に、帰つて女房の顔を見たいなんていつたら、ぶんなぐられますからね」「おれだつて、ぶんなぐるぞ。あんまり、のろけるとな。おれは、独身だからな」

「江藤少尉どの、やさしい方かたですよ。おれだつて、客商売だ。解りますよ。やつぱり、育ちだね。そこへいくと、寺本の奴は……」

江藤は体を拭き、ズボンをはいた。「いや、あれは、自由人だよ……」あとをいいかけて、インテリ少尉は口をつぐんだ。「……ちやうど、犬や猫が自由であるようにな」といいかけたのだ。

その夜、兵隊が地下倉庫から支那酒を持出して酔っぱらっているのも、江藤少尉は大目にみた。「程度をすぎさぬようにしろ」

と、倉田班長に注意しておいた。兵隊がこうして生きている喜びにひたっているのを、少尉は当然だと考えた。もっとも、それも程度問題だが……。彼らの前には、これからいつまでつづくかわからない苦難と、死が待っている。別の命令がくるまで、兵隊たちを解放してやりたい……

司令部からの通達で、明後日の入城式には、江藤小隊の所属する部隊も参列し、軍司令官の閲兵を受けることになっていた。

### 3

十五日の朝、部隊本部から、江藤少尉と先任下士官に呼び出しがきた。入城式のことだろうと考え、

江藤少尉は倉田軍曹をつれて本部へいった。

街には、至る処に友軍の部隊が見られた。戦車や砲車やトラックもあった。空地には軍馬が繋がれ、暇になった兵隊が焚火をしている。城内から火災の煙がいくつか空を這っていた。街のどこどころには、死体が転がっている。屋根の向うの城壁の上にも、蠅取り紙についた蠅のような中国兵の死体が見えた。

小学校にある部隊本部へいった。将校と先任下士官が集まっていた。教室には、「徹底抗戦」とか、「抗日救国」と書いた小学生の習字が貼ってあるが、誰も気にする者はいない。将校たちはみな小ざつぱりとした軍装で、どの顔も晴れ晴れとしている。

「よう、見違えるようだぞ」

「こうして見ると、きさまも、案外、色男だな」

「いや、つらいひと月だったよ」

話声がやんだ。

「敬礼！」

参謀懸章を肩から下げたがっしりした体格の中佐が、部隊長や中隊長といっしょにはいつてきた。小松大尉がいった。

「ここにこられたのは、中支派遣軍司令部の森中佐殿である。中佐殿から、話があるから、よく聞くように……」

森中佐が鋭い眼で、将校と下士官を見まわした。陸大出の「天保銭」をつけている。

「休め。わが軍は、敵首都を占領した。誠に御同慶の至りである。この攻撃において示した諸官と、ならびにその麾下部隊の兵の忠勇は、おそれ多いことであるが……、気をつけ！」

将校と下士官は不動の姿勢をとった。

「配慮を安んじ奉ったことと拝察する。命令。わが軍は、明後十七日に、南京市の入城式をおこなう。わが軍は、その日までに、市内に、敵の一兵たりとも、残存するを許さず。各小隊は、城内にある敵兵を、徹底的に肅清せよ。以上が命令である。細目にわたっては、中隊長より、適切な指示があるはずである」  
ここで、中佐はいちだんと声を大きくし、威圧する光のある眼で一同を見まわした。

「これは、今なお、市内に残留する敵性国民に、皇軍の威武を示すためである。同時に、軍の次の作戦にたいして、後方の治安を維持するためでもある。わが軍は、敵の首都を陥落せしめたとはいえ、敵の抗戦意欲はきわめて旺んであつて、今後の戦局といえども、決して樂觀を許さない。なお、多数の中国敗残兵が、一部地区において、一般人にまぎれこんでいるという確実な情報がある……」

森中佐の前に整列した十人ほどの小隊長のなかで、江藤少尉は参謀のいまの命令を、もう一度、頭のなかで反芻していた。「市内に、敵の一兵たりとも残存するを許さず。城内にある敵兵を、徹底的に肅清せよ……」彼には、この意味がよく呑みこめなかった。むろん、武器をとって抗戦する敵兵は、せん滅しなければならぬ。しかし、武器を棄てた敵兵は、どうだろうか？ 彼らは、捕虜だ。「俘虜ハ、敵ノ政府ノ権内ニ属シ、コレヲ捕ヘタル個人、マタハ部隊ノ権内ニ属スルコトナシ。……俘虜ハ、人道ヲ以テ取扱ハルベシ……」学生時代に勉強した知識は、江藤清少尉にそう教えた。司令部の森参謀は、城内の敵兵は徹底的に肅清せよというが、もし彼らが武器をすて、軍服を脱いでいた場合、一般市民とは、どうして区別したらよいだろうか？

しかし、この命令の意味することは、直感的に少尉には解っていた。この命令を遂行するために、われわれは呼ばれたのだ。江藤少尉には自分の顔の青ざめるのがわかった。

小松大尉が号令をかけた。

「気をつけ！ 敬礼！」

答礼した森中佐は赤い裏の刀帯に吊った軍刀を片手につかみ、赤革の長靴をききませて、部隊長とと

もに出ていった。

「小松中隊はあつまれ！」

小松大尉がいった。ほかの中隊長も部下を集めた。小松大尉は地図をひろげた。

「では、細目について指示する。第一小隊、小川少尉だ。小川少尉は、入城式にそなえ、軍司令部附近、および主要道路の警備にあたれ。第二小隊、江藤少尉……」

「はッ」

「貴公は、英語が話せるそうだな。この避難民が集結している地区の警戒にあたれ。この地区は、外人が管理しているそう。第三小隊も、江藤少尉に協力して、残敵を掃蕩せよ」

他の中隊でも、中隊長が地図をひろげて指示していた。揚子江……とか、埠頭とか、軽機分隊という言葉が、江藤少尉の耳にはいった。江藤少尉はこの緊張した空気のなかで、ひとりでに軀の奥がふるえてきた。

「小松大尉どの……」江藤少尉はいった。「質問してよろしいですか？」

「何だ？」

「その敵兵の識別ですが、それは明かに軍服を着ている者をさすのでしょうか？ それから、掃蕩とか、肅清とかいう意味であります。自分らは、どのように考えたらよいのでしょうか？」

「命令では、一兵たりとも残存するを許さずとある。肅清とは、文字どおり、肅清だ。いいか、江藤少尉、おまえは、この南京が、二日まえまで、敵の本拠であったことを忘れてはならんぞ。ほかに、質問はないか？」

「ありません」ほかの将校たちは答えた。

「諸官は、肅清とか、掃蕩の文句にこだわる必要はない。ここは戦場であって、大学の教室じゃないんだから」将校や下士官は笑った。「残敵とは、敵の戦力になるものを、すべてさすのだ。いいか、江

藤少尉、わかったか？」

「はあ……」

江藤少尉は仕方なくうなずいた。彼はこの命令にたいして、心で抵抗を感じた。同時にそれを命じられた自分のおそろしい立場を知った。ここに立っている自分が、まるで暗い処へいきなりつき落されたように感じられる。

小松大尉は腕時計を見た。

「各隊の行動開始は、一時だ」

大尉の命令はつづき、それが終つて、将校たちは煙草を吸つたり、がやがやとしゃべっていた。まるで演習中に命令を聞いたときと同じようだ。江藤少尉は下士官のなかの倉田軍曹を見た。軍曹は熱心な顔でメモをとり、机にひろげられた地図をのぞきこんだ。

（おれが、この命令に従わなかったら、どうだろう？）江藤少尉は考えた。頭のなかで、声が出た。（……抗命罪だ）

同じ甲幹出の清川少尉が、江藤の肩をたたいた。

「江藤少尉、掃蕩つてのはだな、片づけろということだよ。おれたちは、敵のなかにいるんだ。貴公、どうかしてるんじゃないか？ 戦場に、情けは禁物だよ」

やはり大学出で剣道二段の清川少尉は、江藤少尉をなじる眼でちらと見た。

#### 4

江藤少尉は、倉田軍曹と、小学校の部隊本部を出た。

正午ちかい陽が冬の青空にかがやいているのに、少尉には陽の明るい街も眼にはいらなかった。あたえられた任務を考えると、眼の前が暗くなるようであった。「紅中会」の腕章をつけた二人の苦力クワリがの

ろのろとうごいて、路地にころがった死体を荷車にほうりこんでいた。引いてゆく車で、何本もの腕や脚がゆれた。江藤少尉はその荷車を眼の隅にいられていた。葉を落した柳の並木の横で、荷車はとまった。道路の向うに玄武湖の小波が光っている。そのあたりから、風につて何ともいえないいやな腐臭がした。見ると、蓮の茎が枯れた池にも、服の背中や、伸ばした手や顔がうかんでいて、風が吹くとそれはうごいた。少尉は足早にそこを離れた。

軍曹が追いついて、話しかけた。

「少尉どの、自分に任せてください。少尉どのには向かんですよ。これは、倉田の仕事ですよ」

江藤少尉は笑っている倉田の顔を見つめた。けがれたものを見る眼だ。少尉の眼鏡の奥の眼はいつていた。そうだ。おまえの仕事だよ。好きなだけ血をながすがいいさ。軍曹、おまえには、このおれを、理解することはできないんだ……

倉田軍曹は白い歯をみせて笑っていった。「まったくですよ。戦争に、情けは禁物ですよ。少尉どの……」軍曹はさっきの少尉の言葉を聞いていたらしい。軍曹の細い眼はこういつていた。お坊ちゃん少尉どの、そんな眼でおれを見ないでくださいよ。おれは、大学出のこいつらには、絶対、負けないぞ。ここは、戦場だ……

キヤタピラの音をたてて戦軍が通った。軍曹が横から少尉の顔を見た。

「江藤少尉どの、軍司令部の森参謀は、あれこそ、真の日本軍人だと思わんですか？ 自分は、あの参謀の命令なら、喜んで死にますよ。小隊長は、どうですか？」

年下の軍曹が自分をからかっているのは知っていたが、江藤少尉にはそんなことはどうでもよかった。少尉は出口のない室にいられた囚人のような眼で、明るい通りを見まわした。苦力が死体をひっぱり上げていた。一頭の黒い野犬がうろついている。犬は不気味に毛並が艶々している。江藤少尉は苦笑した。「そうだな。おれには、軽々しくはいえんな。おれは、やっぱり、死ぬのはいやだな」

倉田軍曹が笑った。「江藤少尉どのは、正直ですね」

江藤少尉はたちどまった。まじめな顔で部下を見た。

「軍曹、先に帰ってくれ。おれは、ちょっと、この辺を調べてゆくから……」

「大丈夫ですか？ 自分も行きましようか？」

「大丈夫だよ」

江藤少尉は、おれを一人にしておいてくれと軍曹にいたかったのだ。倉田軍曹は腕時計を見た。

「一時十分前に集合をかけます。それまでに帰ってください」

「ああ、帰るよ」

「じゃ、自分は、先に帰ります」

軍曹は敬礼をして離れた。短い剣を吊った軍服の後姿を見送っていたが、江藤少尉は焼け跡の向うに見える屋根の重なった裏町のほうへあるいた。

江藤少尉は戦場で敵と戦うために出征した。戦場でない場所で、武器をもたない無抵抗な人間を殺すことは考えてもいなかった。彼はいまはじめて、戦争とは何であるかという考えにつきあたった。日本人と中国人は、なぜ、戦わなければならないのかという根本の疑問にもぶつかる。

道路の横は焼け跡で黒焦げの柱がところどころに残り、焼け跡からはまだ煙があがっている。江藤少尉の前を、一人の女が小さな女の子の手をひいて歩いてきた。髪に赤い紐をつけた女の子は、遅れまいと小走りにあるいている。母親は大きな風呂敷包みを肩にかけていた。その横顔で長いほつれ毛が風に吹かれた。女はとぼとぼとあるいている。江藤少尉は立ちどまった。黒い服を着た女の後姿から、二人の中国の女を思い出した。その一人の女の顔がみえる。ほつれ毛が汗で頬についた女はすわって手を合



わせ、何度も頭をさげた。少尉はこれからの自分の任務を思い出し、逃げられるなら、何処かへ逃げてしまいたいと思った。しかし彼は、軍人である自分自身にたちかえった。母子の後姿は遠くなり、女子は母親に遅れまいと、ちよこちよこ歩いている。その二人の姿に、彼は戦争のもつ悲惨さを感じた。あの母子には、罪はないのだ、と心でいった。

江藤少尉は裏通りにはいった。表通りにつづいた煉瓦造りの長屋の角をまがると、そこは空地で、蠅がわあんとびたつ感じで、人の群と喧噪が彼の前にあった。藁葺きの小屋を作っている男たちもいた。一人の女が、江藤少尉を見て、いそいで家にはいり扉をしめた。少尉の近くから、空地は静まっていた。男や女や子供の眼が、日本の将校を見ている。少尉は、誰でもいいからつかまえて、こういいたかった。(おい、男たちは逃げろ！ 何処かへかくれろ！ お前らを殺しに、もうすぐ、軍隊がやってくるぞ。おれは、それをいいにきたんだ……)

言葉でだめなら、手真似でもいい。しかし少尉は唾をのみこみ、横をむいた。彼にはいえなかつた。利敵行為、軍の行動を妨害するスパイ行為……というこの考えが彼の咽喉の奥にひっかかり、彼の足をその場に釘づけにしたのだ。

江藤少尉は空地に背中をむけて、足早に町を出た。

江藤少尉は小隊にもどった。入口の階段に立っていた倉田軍曹は、少尉を見ると、建物にはいった。「全員集合！ 非常呼集だ」

車庫に毛布を敷き、臥そべったり、車座になったりしている兵隊にいった。

「武装をして集まれ。寺本伍長は、各自の弾薬を点検しろ。整列したら、小隊長どのから、命令がある……」

兵隊は武装して裏庭に整列した。倉田軍曹は番号をとり、皆の武装を調べた。兵隊は何ごとがあるのかという緊張した顔だ。

建物の裏口の階段に、江藤小隊長が立った。いくらか青い顔をした少尉は、整列した部下を見渡した。倉田班長が人員を報告した。

江藤少尉は命令した。

「小隊は、これから、市内の残敵を掃蕩する。指揮は、倉田軍曹がとる。鈴木上等兵と篠原一等兵は、おれといっしょに残れ。終り」

軍曹が号令をかけ、五十六名の小隊は、街のほうへ出ていった。あとに二人の兵隊がのこった。小隊が出ていったほうを見ていた江藤少尉は、黙って建物にはいった。いまの命令は、江藤少尉に許されたたったひとつの抵抗であった。